

て家事が思うように進まない時など、イライラしたものでした。それがどうでしょう。息子の方はただの一度もそのような気持ちにはならなかったのです。ただ、ありがたい、ありがたいと思つて毎日を暮していました。

今、息子は三才になりました。その後も、肺炎などで二度入院し、はしかにもかかり、何度か蒼くなるような思いをさせられました。私は子育てが楽しくてしかたありません。この子と共に生活している毎日が何と充実していることでしょう。神様がこの子を私に授けてくださったことを、私は今、深く感謝しています。この子の存在が私にどれだけ多くのことを教えてくれたか分かりません。拾いものの命だからこそ、より豊かな人生を送らせてやりたいと思います。いつ命絶えるとも「ああ、楽しかった。」と言えるような一生をそれが私の務めだと思つています。

二ヵ月間

福島千恵

それは忘れる事ができない。昨年の九月二七日の夕方
の事である。電話のベルが鳴った。「川崎の幸警察の者
ですが」ドキッと緊張する。「福島一朗さんが川崎駅付
近でバイク運転中、乗用車と接触、足を骨折して第二国
道病院に入院しました。今手術中だと思ひます。」サーッ
と血の氣の引く様子がわかる。「怪我は骨折だけですか。
他は頭は大丈夫ですか」という私の質問に傍の人に確認
して「その様です。詳しくは病院に尋ねて下さい。」と言
つて電話番号を教えてください。長い長い二ヵ月の始まり

であつた。

その日、私は久しぶりの妹と一才の甥の来訪に実家の母も誘つて、娘の三才の七五三の計画をたてていた。壁には着物が掛けてある。少しでも慣れた方が良いと母が早々に持つて来てくれた物である。子供を育てる中で三才という年齢は一ツの区切りである。私は三才の娘のお祝いを事の他楽しみにしていた。

住居は、埼玉県蕨市、主人の職場は川崎市、南部線尻手駅より二〇分程のマンション建築現場である。建設会社勤務という仕事柄、現場での事故は心配していた。しかし交通事故とは、無暴な運転をする人ではない。何が起つたのだろう。それにしても何と遠い所なのだろう。主人の通勤の長さを初めて知る。近くの病院に移さねばいけないだろう。次々と色々な思いが巡ってくる。

病院は尻手駅の近くであつた。診察・手術室の棟と道路を隔てて入院病棟のある、想像していたよりも小さな病院であつた。主人は一度手術室に入ったものの、骨が皮膚を破つて外の空気に触れていた事がわかり感染する

と却つて危険なので傷口だけ縫い、傷口がつくのを三週間待ち、手術して二週間後に退院できると言う。病棟の方に案内されて行つてみると、ベットの上で麻醉から覚めかけた主人の膝の少し上と踵に綱線を通し、紐でつるし錘をのせて引っぱる所であつた。廊下の私たち（実父と義母と）に主人の声が聞こえる。それは悲鳴だつた。涙がこぼれて来た。相手の乗用車の人は頭をさげた。病室に通されるとベットの上に痛々しいまでの主人の姿があつた。顔だけは普段の笑顔であつたがほほには涙の後がわかつた。どんなにか痛い思いをした事だろう。

その夜は主人の母が付き添つてくれた。父と帰宅した時は十一時近くで娘の佳央理はずでに眠っていた。着物はそのまま掛けてある。父は軽く食事をとると主人の自転車の後に母を乗せて帰つて行つた。娘の隣りに横になると涙があふれてきた。「五週間我慢すれば帰つて来る。」と何度も心の中で繰り返したが主人の姿が浮んできて寝つく事ができなかった。

明くる日より娘を実家にあずけて病院へ通う日が続き

た。幸い娘は母たちに懐いている。幼い娘は私が出かける時「行ってらっしゃい」と言って笑ってくれた。それでも母は心配して隠れて行く様にと言った。ベットに寝たきりの主人には付き添いの人が付いた。身のまわりの事は任せるにしても病院の食事のあまりの粗末さに、ひたすら主人の好物を作って運んだ。そして勤務中の事故の為仕事関係のお見舞いの方々の応待も私の役目であった。週のうち四―五日は通っただろう。ただ夢中だった。それは事故より四週間後の手術の日まで続いた。その明くる日、娘が発熱し娘の風邪が母にうつり父にうつりして実家は風邪ひきだらけになってしまったのである。風邪の治った娘を連れて家に帰ることにした。あと一週間位娘と二人で通えば主人は退院できると母たちとも話しあったのだ。がその考えは少々甘くその後一ヵ月間娘との二人三脚が続くことになるのである。

三才に満たない娘が一時間近く電車に乗っていられるだろうか。娘の体力を考え、病院には一日おきに通う事にした。荷物は娘の着がえ、お弁当とおやつ、それに本

人が選んだ絵本二―三冊が増えた。車内で座れば蒲田駅までは立たせない様にしよう。川崎駅で乗りかえるので西川口駅ホームの乗車位置も決めた。二十ヵ月の娘は「これ何」から「どうして」の質問に変わっている。会話は尽きないだろう。時折「蒲田行き」の電車が来てがっかりした。「電車まだかな」「遅いわね」「今度の電車鶴見行き、良かった」「この電車どこまで走るの」「荒川を見て「おみずっていう川」駅に着くたび「ここどこ」「あ、黄色い電車、どこまで走るの」「水色の電車」「黄緑の電車」「山の手線」「ぐるっとまわってまた帰ってくるの」「くれよんの中で覚えたと同じ電車の色と質問が次々と出てくる。蒲田駅を過ぎると芝生が広がり多摩川が見える。(やっとここまで来たのだ)と溜息をする。川崎駅に着くと娘を抱いて隣りのホームまで階段を走る。南部線だ。

病院に到着する。娘と昼食をすませると私の仕事が始まる。付き添いの人は手術後一週間までである。主人の身体を拭き、洗たくである。娘はその間松葉杖の主人と

廊下を散歩したり階段に腰かけてお喋りをしている。仕事で忙しい主人と、週に一・二度しか会えなかった娘は、楽しそうだ。私の仕事が一通り済むと主人は玄関まで送ってくれる。娘は「パパ、バイバイ」と手をふる。その瞬間一番つらい。

主人は手術後、傷口が化膿して退院まで一ヵ月かかった。退院の目処がたらず、私たちが行っても一度もベツトから降りてくれない日さえあった。娘は長い電車の中で飽きてきた。混んだ電車の中で「ママ歌って」とせがまれて躊躇していた私は、横で大きな声で泣き出された事もあった。帰宅すると疲れていた。けれど娘はいつもと変わらず明るかった。父親のいない生活に慣れている娘は家においては全く動揺がなかった。私は頭の中も身体も疲れてきた事を感じ始めていた。そんな時の退院であった。十一月二十六日、もう七五三の日も終わっていた。その後通院を続け、事故より四ヵ月後、主人は仕事に復帰した。

育児期の母親の

主婦的状况について

菅野慧理子

突然、小二の長男が入院することになった。ただ今絶食して一週間めである。甘えん坊の彼が泣きことも言わず頑張っている姿をみて、こんなに強い子だったのか、こんなにすなおな心をしていたのかと、その人となりに気づかされた。そして私はこの頃我が子をよくみていなかったなと反省する。看病の合間に小児病棟の中を歩いてみると、各病室で子供がいろんな病氣と闘っている。お母さん達はとてもいとおしそうにそばにつきそっている。大切な大切な「いのち」である。

緊急入院する前の我が家はごく普通の生活をしてい